

# OTANIing

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!



2024.3

vol.238

本山「お煤払い」に参加



## 途上のわれら 学校長 飯山 等

私自身、中高生の私を憶想することは難しくなりましたが、君たちとの毎日のおかげで自分自身も途上の私であるということを感じさせてくれるという意味で、みなさんとの時間はとて

も有難いものになっています。私達はいつかできるできないという物差しの上で、自分の個性や存在の意味を感じるようになってしまっています。プラスを誇らしく思い、マイナスに自分を貶める、そんな高校生だったなあという悔恨を抱きながら、みなさんがそうではなくて、できない現在を揺るぎのない大地として未来に向かって進んでいく、お互いが支え合っていく。大谷の日々が、そんな《われらWe》を生き生きと感じる毎日であれば、と思います。

君たちの未来は、世界を生きる人としての未来だと、世界を場として生き合う未来だと思います。私自身、大谷に縁を持ってから今年で50年になります。大谷は2025年には満150歳を迎えます。つい数年前までは海外の姉妹校とか、日常の大谷の中に留学生がいるということがない学校でしたが、若い皆さんが生きていく未来は、多様性を基に共に行き合う、そのような一人一人になるということが必然する未来だという思いで大谷の改新を考えてきました。世界が様々に抱えている問題がなくなる世界を生きることをひたすらに望むのではなく、現実がそうではなくても、問題をみんなで話し合っ、共有し合っ生きていく、そういう一人一人になることを大切なこととする。私たちはともすれば自分を、綻びのない完結したものとして思い描いたりしがちですけれども、私の中に欠如、欠けているものを感じるこそが大切なのではないかとこのことを、この歳になって思っています。150年という大谷の時間は、常に途上だと、そしてそれは若々しい途上だということを改めてみんなと思い合えたらと思います。

歳を重ねると綻びのない完結した人間になって、この人生を終えていけるという思いは大きな勘違い、傲慢がもたらす考えで、若い皆さんにこんなことを言うのは相応しくないのかもしれませんが、歳を重ねても人間は完結しない、かえって綻びが自分の中に感じられる。Unbecomingな《わたし》です。そのことを誤魔化さず、居直らない。孤独ではなく、われらとして生き合うその場が、その関係が、私の綻びを、欠如を、傷のない完成のための負ではなくて、そこで他者を感じることでできる、ありがたさを感じることで私にさせてもらえる。

今年の9月に大谷の姉妹校であるニュージーランドのファンガレイ女子高校生が大谷を訪問して交流の時間を持ちました。その時の引率の先生方が、大谷の生徒が明るい、楽しそうだと、学校生活がこんなふう楽しい、明るいということを感じさせる学校はうらやましい、と口々に言われました。また11月にも韓国のソウルの近くのジンソン女子高等学校から、校長先生と宗教部長の先生ら6名の先生が訪ねてこられました。それは、韓国政府の方針で外国の学校と交流する場合は国の承認が必要ということで、そのための協定を結ぶために来られました。その時も先生方を校内案内して、ちょうど休み時間であった君たちにも会ってもらいました。部屋に戻ってこられた先生方が、ファンガレイの先生と同じように、きみたちの明るさ、学校生活が楽しいと笑顔で話してくれる学校であるというのが、自分たちにとっては驚きのことだと。12月に50名ほどの高2の皆さんが韓国への研修旅行に行き、その中の一日をジンソン女子高等学校と交流しました。同じ時期に大阪に修学旅行に来ていた70名ほどのジンソン女子高等学校3年生が大谷を訪問して、2学期末試験中でしたが試験後に交流の場を持ちました。来年は京都に宿を取って、大谷との交流を日程の中にしっかり入れて考えたいと言って帰られました。今後、さまざまな機会に、より深められた形での交流が進んで行くようにと願って、今年1月12日にはジンソン女子高等学校を訪問して姉妹校締結に至りました。何か奇異の人を迎えるというのではなく、自然に「こんにちは」とか、「はじめまして」と声を掛けられる君たちです。私や、向こうの校長先生方が無意識のうちに持っていた垣根を、君たちの柔らかい笑顔が溶解してくれたのだと思います。

途上の人というのは道半ばという、どこか果てしなさの中で疲れを感じるような、完成しないという嘆きに転じるようなことではなくて、正に途上、みんな未完成で未熟である、だからこそ生き合っ、一人であればその未熟をもって完熟することを至上の命題にしてしまいがちな私が、集い合っっているという場に身を置いているが故に、未熟をもって自分の未来が開かれる、切り拓いていくという力を与え合っ、与えられるだけでなく、与える。そういう《われら》でありたいと思います。

みなさんと共に過ごせたことを、わたしはとても嬉しく、誇らしく思います。自分の人生の中でもとても喜ばしい、ありがたい時間だったと、みなさんにお礼を言います。どうもありがとうございます。